「夜の御座」の葵上
―『源氏物語』における「添臥」をめぐって―

竹内正彦

一、「夜の御座」に入らぬ葵上

葵上のいつもながらの態度が光源氏をいつも以上に苛立たせる。北山での治療によって瘧病から恢復したとはいえ、病後の衰えはいかんともしがたい。帰京の挨拶に出向いた宮中に来合わせていた左大臣の誘いに応じ、左大臣邸にやってきた光源氏であったが、葵上は相も変わらず左大臣の催促によってようやく姿を現す始末。北山での話をする気も失せるほどのそっけなさに、光源氏がかけることばも、自然、にがにがしいものとなるのであった。

「時々は世の常なる御気色を見ばや。たへがたうわづらひはべりしをも、いかがとだに問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれど、なほ恨めしう」と聞こえたまふ。からうじて、「問はぬはつらきものにやあらん」と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。「まれまれはあさましの御言や。問はぬなどいふ際は異にこそはべるなれ。心憂くものたまひなすかな。世とともにはしたなき御もてなしを、もし思しなほるをりもやと、とざまかうざまにこころみきこゆるほど、

いとど思しうとむなめりかし。よしや。命だに」とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君、ふとも入りたまはず、聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し乱るること多かり。　（「若紫」①二二六～二二七頁）

『源氏物語』「若紫」巻の一節。光源氏は、いつまでも打ち解けることのない葵上に対して、時々は世間並みの夫婦としての様子が見たい、堪えがたく病んでいたのだから気分はどうかとさえ「問ひたまはぬ」のはやはり恨めしいと難じる。せめてひとことといたわりのことばがあってもよいのではないか。あまり気が進まないのにもかかわらず、左大臣を気の毒に思ってやってきた光源氏にとって、普段と変わらぬ葵上の態度がとても冷淡なものに映るのであった。

対する葵上は「問はぬはつらきものにやあらん」とだけいって流し目をおくる。「問はぬはつらき」には『源氏釈』が「君をいかておもはん人にわすらせてとはぬをつらき物としらせん」という出典未詳歌を指摘するが、[1] ここは光源氏が口にした「問はぬ」ということばを葵上がとらえ、切り返していくところに眼目があろう。なかなか訪れぬ光源氏にむかって葵上は「問はぬ」を「訪はぬ」にずらしつつ、「訪はぬ」のは「つらき」こととあなたは知っていたのかと痛烈な皮肉を浴びせかけたのであった。まさに核心をつかれた光源氏は、「訪はぬ」などということはわたしたちのような夫婦で用いるべきではないとしながら、「よしや。命だに」といって、「夜の御座」に入ってしまう。が、「女君、ふとも入りたまはず」。葵上は、光源氏に従って「夜の御座」に入ることなく、打ち解けない態度を崩さないのであった。

この場面における光源氏について、玉上琢彌は「源氏は負けである」としつつ光源氏がひとりで「夜の御座」に入ってしまうことを「捨てぜりふで逃げ出す」と評し、[2] 大津直子は「本心を射抜かれた光源氏は、反感を抱くと同時に動揺し」、「敗北」を喫して「床につくしかない」ことを指摘し、[3] 古田正幸は「葵の上が当該場面で一言しか発しないことに対して、光源氏の口数が増えていることも、光源氏が窮地に追い込まれたことを示している。光源氏はついには「夜の御座に入りたまひぬ。」と、独り寝することにもなった。光源氏の完敗といってよいのではないか」と述べる。[4]

光源氏は、葵上のひとことに対して多くのことばを費やし、ついにはひとりで「夜の御座」に入るのであるから、勝敗という観点から見れば、光源氏が「負け」たとすることも理解でき

なくはない。けれども、この場面には続きがある。

女君、ふとも入りたまはず、聞こえわづらひたまひて——。

葵上は光源氏のあとを追ってすぐに夜の御座に入らなかったことは確かである。けれども、それは「聞こえわづらひたまひて」と続く。この「聞こえわづらひ」の動作主について、『湖月抄』が「源の葵にいひ煩ひ給ふ也」と注するほか、日本古典全書が「源氏は葵上を誘ひあぐねて」[6]、日本古典文学大系が「「入れ」と申しかねなされて、源氏は溜息をついて横になって居られるにつけても」[7]、新日本古典文学大系が「（源氏は）お声をかけるすべに窮されて」とするなど[8]、多くの注釈書が光源氏ととっており、その解釈に従えば、光源氏は「夜の御座」のなかから、外にいる葵上に声をかけあぐねていることとなる。しかしながら、ここには別解があり、玉上琢彌は次のように指摘している。

結局のところ源氏は女君を言いこしらえかねて、説得することができず、嘆息しながら横になっていられるが、の意にとるのが普通である。一説は、ここを女君を主語とし、女君は源氏に言いかける言葉もなく嘆息をしながら横にはなられたが、源氏は気にくわないかしてねむそうなふりで女君にかまわず、ととる。これでは女君がすっかり負けたことになる。[9]

玉上が掲げる「一説」は、当該箇所の動作主を葵上とするものである。ここを葵上とすると、「夜の御座」に入ってしまった光源氏に対して、葵上が「言いかける言葉もなく嘆息しながら横になられ」、光源氏は「ねむそうなふりで女君にかまわず」にいると解することとなるが、玉上は「これでは女君がすっかり負けたことになる」として退けている。

「聞こえわづらひ」の動作主を葵上にするということは、「聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへる」の部分を「女君、ふとも入りたまはず」にそのまま続けて理解をするものであるが、現代の主要な諸注釈書のうち、そのような立場で解釈しているのが、完訳日本の古典および新編日本古典文学全集である。完訳日本の古典では「「聞こえ…臥したまへるも」は、葵の上の動作と解す」と注しつつ、「女君は、すぐには従いておはいりにならず、申しあげる言葉もさがしあぐねられて、ため息をついて横におなりになるが」と現代語訳し[10]、新編日本古典文学全集もそれを踏襲している[11]。ただし、これらの解釈は島津久基『対訳源氏物語講話』に紹介された見解をふまえてのものであろう。

島津久基『対訳源氏物語講話』は「茲に異解として、「聞え煩ひ…臥し給へるも」を葵の事とする有朋堂文庫本頭註の武笠

氏の説がある。そして寧ろ此の方が面白く且場面が生きて来る」として、「武笠説が稍珍らしい嫌はあるが、賛意の表し得られる節が多いから、仮に之に就いてみることにした」としたうえで、当該箇所を「女君は直ぐ後から踵いても行かず、暫らく何と取つく島も無く困りきつて、シク〳〵泣きながらやつと床へ来て横になられたけれど、それが又源氏はどうも気に入らぬのであらう、態と眠たさうに眼を閉ぢて、悩ましく我人をめぐるさま〴〵の念に、いつまでも耽られるのであつた」と現代語訳をしている。[13]

島津はこの解釈を「有朋堂文庫頭註の武笠説」に基づいていたものとしているが、その有朋堂文庫頭注には「何と返事せんかと困りて」とされているのにすぎない。[14]また、島津自身も先の説明に続けて「普通の説も無難であり、且「ふとも入り給はず」から、暫くして後から閨に入つて行つたといふ推断は出来ても、明白な叙述はない点に、武笠説の弱点はあると言へば言へるから、此の点に疑問を存して、尚正解を異日に期したい」と述べているように、この別解はひとつの試みとして提示されたものと理解される。けれども、当該部分の動作主を誰ととるかという問題は、光源氏と葵上との関係、さらに葵上という作中人物のありようを考えるうえでも看過できないものであろう。

「聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへる」のは光源氏か、葵上か。このとき、「夜の御座」で葵上はどのようにふるまったのか。そして、光源氏が「夜の御座」にひとりで入ったことは「負け」といえるようなふるまいだったのか。葵上は「添臥」として光源氏と結婚をしたが、これらのことを考えるためには、ふたりの結婚形態をも視野に入れて考えなくてはならないだろう。『源氏物語』における「添臥」の問題をめぐりつつ「夜の御座」における葵上の姿を見つめてみたい。

二、左大臣家における光源氏の部屋

光源氏は、葵上を「夜の御座」の外に残し、ひとりでそのなかに入ってしまう。「夜の御座」とは「御寝所」[15]と考えてよかろうが、はたしてそれはどこの「夜の御座」であったのだろうか。

当該場面において光源氏が左大臣邸に迎えられた折の様子は、次のように語られている。

殿にも、おはしますらむと心づかひしたまひて、久しう見たまはぬほど、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへたまへり。女君、例の、這ひ隠れてとみにも出でた

まはぬを、大臣切に聞こえたまひて、からうじて渡りたまへり。（「若紫」①二二六頁）

光源氏を迎えた左大臣邸は「いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへ」られていた。北山から帰って参内した光源氏を迎える際、「大殿参りあひたまひて」とあり（「若紫」①二二五頁）、左大臣もたまさかに参内していたように語られているが、ここで「おはしますらむと心づかひしたまひて」とされていることからすると、「左大臣は偶然この場に参り合わせたのではなく、源氏を自邸へ連れ帰ろうという意図から参上した」との解釈[16]は首肯できるものである。そもそも光源氏が北山を離れる際には左大臣家の人びとが迎えに来ていた（「若紫」①二二二～二二三頁）が、それも左大臣の指示によるものだったのであろう。また、「久しう見たまはぬほど」とあることから、光源氏がかなり間遠になっていたこともうかがわれるため、宮中で左大臣が光源氏に「のどやかに一二日うち休みたまへ」と声をかけ、「やがて御送り仕うまつらむ」と誘った（「若紫」①二二五頁）のも、この日はなんとしても光源氏を自邸に迎えようという左大臣の思惑によるものであったと考えられる。

しかしながら、「女君、例の、這ひ隠れてとみにも出でたまはぬ」とあるように、肝心の葵上は、いつものようになかなか姿を現さない。「大臣切に聞こえたまひて、からうじて渡りたまへり」という表現には、左大臣のいらだったことばによって、ようやくのこと葵上が呼び出される様子も思い浮かべることができる。けれども、ここで注意したいのは、葵上が「渡りたまへり」とされていることである。

『湖月抄』は「源の方へ葵のわたり給ふなり」とし[17]、新編日本古典文学全集頭注は「女君の部屋から源氏の前へ」とする[18]が、この「渡る」は「（道・廊下を通って）行く。また、来る」の意と解することができ[19]、たとえば、光源氏が二条院の東の対と西の対との間を移動することが「西の対に渡りたまへり」「御方に渡りたまひて」とされる（「葵」②六八～六九頁）ように、少なくとも同じ部屋のなかでの移動とは考えにくく、ここでは葵上が自室を出て光源氏のもとにやってきたものとすることができる。またその後、ふたりが葵上の部屋に移ったとの表現もなく、そのように考えるべき理由もないため、この日、光源氏がいるのは左大臣邸における光源氏の部屋であり、そこに葵上が自室からやってきて滞在していることとなる。したがって、光源氏が入る「夜の御座」もまた光源氏の部屋のそれだと理解されるのである。

光源氏は、十二歳の折、元服と同時に葵上と結婚して左大臣

邸に迎えられるが、そこには光源氏の部屋が設けられていた。

大人になりたまひて後は、ありしやうに、御簾の内にも入れたまはず、御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めにて、内裏住みのみ好ましうおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なく思しなして、いとなみかしづきこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを選りととのへすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほな思しいたつく。

（「桐壺」①四九頁）

「内裏住み」を好む光源氏は、「五六日」宮中に伺候し、左大臣邸には「二三日」退出していたが、「ただ今は、幼き御ほどに、罪なく思しなし」た左大臣は、それでも光源氏を大切に扱い、「御方々の人々」すなわち光源氏方と葵上方の女房たちをそれぞれ「選りととのへすぐりて」仕えさせたのだという。「御方々の人々」とあるため、光源氏と葵上とは左大臣邸においてそれぞれ個別に部屋を有していたと考えられるが、それは葵上が亡くなるまで変わらなかったようで、もののけに憑かれた葵上のための加持祈祷などを行う折にも光源氏はその「わが御方」を用いている（「葵」②三二頁）。

「帚木」巻の冒頭近くには「内裏にのみさぶらひようしたまひて、大殿には絶え絶えまかでたまふ」とある（「帚木」①五三頁）ことから、「五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日」という状況が十七歳当時も継続していたものと思われる。すなわち、光源氏は左大臣家の婿となったものの左大臣邸に住みつくことなく、内裏住みを主として左大臣邸には宮中から退出するという生活を続けていたのであった。

雨夜の品定めの後には「かくのみ籠りさぶらひたまふも、大殿の御心いとほしければ、まかでたまへり」とあって宮中から左大臣邸に退出しているが、その直後、「人のけはひも、けざやかに気高く、乱れたるところまじらず」と葵上の様子が語られる（「帚木」①九一頁）。また「若紫」巻では「君は大殿におはしけるに、例の、女君、とみにも対面したまはず」と描かれ（「若紫」①二五一頁）、「紅葉賀」巻でも「内裏より、大殿にまかでたまへれば、例の、うるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御気色もなく苦しければ」とされる（「紅葉賀」①三二二頁）ように、左大臣邸への退出の記事の直後に葵上の様子が語られる。部屋にやってきた光源氏に葵上がすぐに対面しないことが常態化していたものの、内裏から左大臣邸に退出した光源氏は、まず葵上のもとを訪れていたのであった。

しかし、そうした生活のなかにあっても左大臣邸における光源氏の部屋は維持され続ける。

……さてはづしてむはいと口惜しかべければ、まだ夜深う出でたまふ。女君、例の、しぶしぶに心もとけずものしたまふ。「かしこにいと切に見るべきことのはべるを、思ひたまへ出でてなん。立ちかへり参り来なむ」とて出でたまへば、さぶらふ人々も知らざりけり。わが御方にて、御直衣などは奉る。惟光ばかりを馬に乗せておはしぬ。

（「若紫」①二五二～二五三頁）

若紫を父の兵部卿宮が引き取る意向であることを聞いた光源氏は、その前に二条院に連れ出すべく、「夜深う」左大臣邸を出て、若紫のもとに出かける。「女君、例の、しぶしぶに心もとけずものしたまふ」とあるように、この夜、光源氏は葵上の部屋の「夜の御座」において葵上とともにいたものと思われるが、その「心もとけず」にいる葵上に対して、二条院に急用ができたことを言い、部屋を出る。「さぶらふ人々も知らざりけり」とあることからすれば、光源氏と葵上はすでに葵上の部屋の「夜の御座」に入っていたのであろうが、光源氏はそこから「わが御方」である自身の部屋に行き、「御直衣」などを着たうえで惟光を供として出かけていくのであった。

左大臣邸には光源氏の部屋が設けられていた。しかし、この「わが御方」はあくまでも光源氏だけの部屋であり、光源氏が葵上と逢うときには葵上の部屋に出向くことを通例としていたのであった。そのように考えると、葵上が光源氏の部屋にやってきていると解される当該場面は、通例とは異なる状況にあることとなるが、これもやはり左大臣の差配によるものであろう。左大臣は、光源氏を自邸に誘う際、「のどやかに一二日うち休みたまへ」と声をかけていたように、この日、光源氏が左大臣邸にやってきたのは病後の養生のためであった。夕顔の死後、二条院に病んだ光源氏を左大臣が「日々に渡りたまひつつ、さまざまのことをせさせたまふ」のであったが、その折も左大臣は宮中の「御宿直所」に出仕した光源氏を「わが御車にて迎へたてまつりたまひて、御物忌何やとむつかしうつつしませたてまつりたまふ」とあった（「夕顔」①一八三頁）。「御物忌」に籠もるためである以上、葵上と同室というわけにはいくまい。その折と同様に、光源氏は左大臣の車でこの邸に設けられた光源氏の部屋に迎えられたのであった。

したがって、この時、葵上が光源氏の部屋に呼ばれるのは、そうした光源氏の見舞いという体裁によるものであったと考えられる。にもかかわらず、ようやくやってきた葵上は光源氏に

病後の具合を「いかがとだに問ひたまはぬ」ばかりか、「問はぬはつらきものにやあらん」との皮肉を浴びせかけてくる。病後の光源氏にとってみれば、いつものこととはいえ、とても堪えられるものではなかったのだろう。

かくして、光源氏は自室に据えられた「夜の御座」にひとりで入ってしまうことになるのであったが、そのふるまいはどのような意味を持つものだったのだろうか。

三、「夜の御座」に入る順序

光源氏は葵上を外に残したまま「夜の御座」に入るが、そもそも「夜の御座」に入るのは、男女どちらが先なのだろうか。『落窪物語』巻二には「御帳のうちに二所ながら入りたまひぬ」とあり（一八四頁）、中将と女君とが同時に「御帳のうち」に入ったことをうかがわせる例もあるが、それはむしろ例外といえるものであるようだ。『江家次第』巻第二十「執聟事［近代例］」には次のようにある。

聟公入二帳内一、姫君出、［必用三鬘濃袴一、依二不レ待レ人之心一後出云々、］聟公解二装束一掩レ衾、［物吉之女上臈覆、］車引入、［随身雑色着二其所一］

（新訂増補故実叢書『江家次第』五二七頁）

この記事によれば婿取婚の場合は、「聟君」たる男性が先に「帳内」御帳の中に入り、「姫君」たる女性が「出」るのだといい、その理由を人を待たない心によるとする。この記事について、高群逸枝は「婿取式では女が先に入帳し、臥床しており、そこへ男が入るのを正式とする」とし、「古例は、深夜、女の臥床へ男が通つた妻問婚時代を承け、その伝統に忠実であろうとする精神にもとづいて作られたものであつて、この例のようないわゆる近代例は、その心にそむくものとせねばならない」とする[20]。ただし、『落窪物語』巻二における面白の駒と四の君の婚姻二日目には面白の駒が入っている御帳のなかに四の君が「出でたまひにけり」とあり（一五九頁）、巻四における権帥と四の君の結婚においても、権帥のいる御帳のなかに四の君が「出でたまひける」とされる（三一二頁）ことから、男性が御帳台に入ったのちに「姫君出」ということが必ずしも平安後期の「近代」に限った例とはいえないようだ。

けれども、『江家次第』においても女性が「姫君入」ではなく「姫君出」とされていることには注意が必要である。先に掲げた面白の駒と四の君の婚姻の例ではその三日目には「四の君は帳のうちに据ゑたりけるに、ふと入り来て臥しにければ、え

逃げず」とあり（一六一頁）、女性が御帳のなかにいてその後に男性が入っているのがわかる。「姫君出」というのは、「婿が入ってから、新婦が出てきて帳内に入る」ものともされるが、[21]「出」とされるのであるから、あらかじめ女性は御帳台のなかにいて、男性が入った後に几帳等によって隠していた姿を見せるということではあるまいか。『長秋記』元永二年（一一一九）十月二十一日における源有仁と公実女の婚礼の記事では「次女主入帳中、次聟公入自帳東面解脱」とあり（増補史料大成『長秋記』（一）臨川書店、一七三頁）、「女主」の御帳台のなかに「聟公」が入るとされている。婿取婚の場合、女性は「女主」として男性を迎える立場にあり、したがって女性が先に御帳台のなかに入るかたちをとっていたものと思われるのである。『源氏物語』「夕霧」巻でも「女君は、帳の内に臥したまへり。入りたまへれど目も見あはせたまはず」とあり（「夕霧」④四七二頁）、外出先から帰ってきたとはいえ、雲居雁の臥す御帳のうちに夕霧が入っており、結婚が継続している状況でも同様の形態をとっていたことが推察される。

一方、男性がいる御帳のなかに女性が入る例もある。『左経記』寛仁二年（一〇一八）三月七日における後一条天皇への威子入内の記事では、「頃之自内早可令上給之由、有御消息」とあり（増補史料大成『左経記』臨川書店、六四頁）、天皇から早く上るべき催促の「御消息」があったことが記されているが、その折の様子が『栄花物語』には次のように語られている。

帝はひた道に恥づかしう思しめし交したるに、しぶしぶに上らせたまへれば、夜大殿に入らせたまふほど、いみじうつつましうわりなく思しめされて、やがて動かでゐさせたまへれば、近江の三位参りて、「あなもの狂ほし、などかくては」とて御帳のもとにおはしまさすれば、上起き居させたまひて、御袖を引かせたまふほど、督の殿、むげに知らせたまはざらん御仲よりも、はゆく恥づかしう思しまさるべし。さて入らせたまひぬれば、殿の上おはしまして、御衾まゐらせたまふほど、げにめでたき御あえものにて、ことわりに見えさせたまふ。

（「あさみどり」②一三九～一四〇頁）

天皇の催促によって「しぶしぶに」上ってくるものの、「夜大殿に入らせたまふ」折にはその前でじっと動かないままとなってしまった威子に対して、天皇の乳母である近江の三位が「あなもの狂ほし」として「御帳のもと」に押しやり、天皇が起き上がって威子の袖を引いてなかに入れたのだという。

『栄花物語』には、ほかに、治安元年（一〇二一）二月一日

に東宮敦良親王（後朱雀天皇）に嬉子が入内する折の様子を「やや夜更けて上らせたまへる」とし（「もとのしづく」②二二二頁）、やはり女性である嬉子が男性である東宮のもとに参上した例も見いだせるが、万寿四年（一〇二七）三月二十三日に東宮敦良親王（後朱雀天皇）に禎子が入内した折の様子も「上らせたまへど、動きもせさせたまはねば、上出でさせたまて、御帳の内にかき抱きて入らせたまぬ」と語られており（「わかみづ」③一〇〇頁）、禎子が御帳のなかに入らないために東宮が御帳から出て禎子を抱えてなかに入れたとする例も見られる。

服藤早苗は、婚礼の折に夫婦に衾がかけられる衾覆儀に注目して、「天皇・春宮の婚礼の衾は新郎方、初渡御儀の衾は新婦方、貴族層は新婦方で調進すべきものだった」としつつ「これは天皇・春宮は嫁取儀礼、貴族層は婿取儀礼だったことと見事に対応している」と指摘するが[22]、それはこの御帳に入る順序についてもいえることであろう。すなわち、貴族層の婿取婚の場合は、女性が先に御帳に入り、そののちに男性が入るのに対して、天皇・東宮の嫁取婚の場合は、男性が入っている御帳のなかに女性が入るのであった。

『源氏物語』では夕霧が匂宮を六君の婿として迎えているが、その折は「六条院の東の殿磨きしつらひて、限りなくよろづをととのへて待ちきこえたまふ」とある（「宿木」⑤四〇一頁）ように、六君の居所である六条院の東北の町に迎え、そののちは「同じ南の町に、年ごろありしやうにおはしまして」とある（「宿木」⑤四一一頁）ように匂宮を六条院の春の町に住まわせて六君のもとに通わせる。光源氏を婿として迎えた左大臣も、またそれと同じように左大臣邸のなかに設けた光源氏の部屋に光源氏を据え、そこから葵上のもとに通わせることを目論んでいたのであろう。光源氏が婿であるかぎり、光源氏は自身の方から葵上の部屋に出向き、葵上のいる「夜の御座」に迎えられるということになろう。しかし、葵上の部屋に足を運んでも「とみにも対面したまはず」（「若紫」①二五一頁）、「ふとも対面したはまず」（「花宴」①三六一頁）ということが常態化していたのだと語られる。繰り返されるその叙述は、葵上のいる「夜の御座」に光源氏が入っても葵上がなかなか姿を見せなかったという状況をも語っていよう。そのたびごとに光源氏の体面は傷ついていく。左大臣がいくら部屋を磨いてもそこが光源氏の落ち着ける場所とはならなかったのである。

このように見てくると、当該場面の特異性が明らかになってくる。光源氏は葵上をひとり残したまま自身の部屋の「夜の御座」に入ってしまうのであり、それは婿としてのふるまい方で

はないのであった。そのふるまいがもつ意義とは何か。そもそも葵上は光源氏の「添臥」として結婚したのであったが、ここにはそのことが深く関わっているように思われるのである。

四、「添臥」としての葵上

葵上は「添臥」として光源氏と結婚した。その経緯を物語は次のように語っている。

引入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御むすめ、春宮よりも御気色あるを、思しわづらふことありけるは、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色賜らせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添臥にも」ともよほさせたまひければ、さ思したり。

（「桐壺」①四六頁）

「桐壺」巻における桐壺帝と左大臣とのやりとりであるが、それによれば葵上は東宮から入内を求められていたが、左大臣にはすでに光源氏と結婚させたいとの思惑があり、桐壺帝の「添臥にも」との意向を受けてそのようなことになったのだという。とくに帝の意向をめぐる表現がぼやかされているが、「賢木」巻における弘徽殿大后のことばのなかにも「弟の源氏にていときなきが元服の添臥にとりわき」とある（「賢木」②一四八頁）ため、物語の世界では葵上は光源氏の「添臥」であったと認識されていたことが確認できる。[23]

「副臥」とも表記される「添臥」は、「成年式を迎え、元服加冠の儀を終えた東宮・皇子などに、当夜、女子を選んで添い寝をさせる風習があり、その相手として選ばれた女子をいう」とされ、「成年に達した男子の資格に、女性との交渉を条件にしていた古代社会の成人式の遺風」であり、「平安時代にはすでに形式化されたものになってはいたが、副臥に選ばれた女性がそのまま、正妻となることも多かった」と説明される。[24] しかしながら、「添臥」ということばは必ずしも一般的なものではなかったようだ。[25]

『北山抄』巻四「皇太子元服事」には「添臥」について次のような記述が見える。

息所参事。［寛平九年七月三日丙子、為子内親王当夜参入。延喜十六年十月廿二日甲辰、故左大臣女参入、用レ輦。応和三年二月廿八日辛亥、昌子内親王参入、俗謂二之副臥一乎。成明親王元服夜、大納言師輔卿女参入。以二太政大臣孫一、聴二輦車一。見二李部王記一。］

（土田直鎮等校注『神道大系朝議祭祀編』（三））

神道大系編纂会、二四四頁）

敦仁親王（醍醐天皇）の后為子内親王、保明親王の后仁善子（故左大臣女）、憲平親王（冷泉天皇）の后昌子内親王、そして成明親王（村上天皇）の后安子という親王の元服の夜に参入した女性たちの記事をあげ、「俗謂之副臥乎」として「添臥」と呼ぶことが「俗」のものであるとする。同様の記事は、『紫明抄』巻一にも見られる。

延喜十二年十月廿二日、故左大臣女参、俗謂副臥、［見于李部王記］

寛和二年七月十八日、三条院［于時東宮］御元服、同日立太子年十一、法興院相國女尚侍綏子為副臥［見大鏡］

（田坂憲二編『紫明抄』源氏物語古注集成（一八おうふう、二三頁）

ここでも「俗謂副臥」とされ、『北山抄』にあげられていた保明親王の后仁善子の例のほか、「見大鏡」として居貞親王（三条天皇）の后となった綏子の例があげられている。たしかに『大鏡』には「三条院の東宮にて御元服せさせたまふ夜の御添臥にまゐらせたまひて」とあり（二四四頁）、また『栄花物語』にも「尚侍になしたてまつりたまひて、やがて御副臥にと思し掟てさせたまひて」とある（「さまざまのよろこび」①一四一頁）ことから、綏子が「添臥」とされていたことが認められる。

「添臥」について、服藤早苗は、元服の夜に参入した例として、先に掲げたもの以外に、清和天皇の女御多美子、朱雀天皇の女御熙子女王、為平親王の后源高明女などの例をあげつつ、「「副臥はいずれも東宮・皇子など身分の高い男子の元服に選ばれている」のではなく、副臥とは、天皇・東宮・準東宮の元服に選ばれ参入する女性、とするべきではなかろうか」としたうえで、「光源氏は、「準東宮」的な身分の男性として造型されているのではないかと推察される」とする。[26] また、青島麻子は、「添臥」の用例として、さらに『海人の刈藻』『木幡の時雨』における例などもあげ、「古記録・史料類、文学作品ともに「添臥」は常に「参」という表現と共に用いられていた」と指摘しつつ「わずかな用例から結論を急ぐのは危険であろうが、自身が女のもとに通うことでの婚姻開始が一般的な諸親王と、后妃を入内させる形をとる天皇・東宮の場合とは自ずと区別されているのかもしれない」としたうえで、光源氏の場合は「公的な位置づけとしては源氏に過ぎないことを十分に確認しつつも、東宮をも凌ぐ「私物」としての位置も示唆されるという、光源氏の地位の両義性が、言葉の上においても呈されている」と述べる。[27]

これらの先行研究によって、「添臥」はその用語例を見るか

ぎり天皇・東宮等に限定されるもので一般貴族には認められないこと、光源氏の場合は東宮に準じた帝の配慮に基づいた特別な扱いとしなければならないことなどが明らかにされてきたが、そもそも「添臥」はどのような意義を持つものであったのだろうか。

『源氏物語』「夕霧」巻では、瀕死の一条御息所に対する落葉宮の姿が「つと添ひ臥したまへり」と語られている（「夕霧」④四三八頁）が、この表現に着目した津島昭宏は、ここに「招魂蘇生」の意義を読みとりつつ、「添臥」にもふれて「男を一人前に成長させるのに、女が男に「添ひ臥す」ことで、そこに何かしらの力が働いていると考えられるのかもしれない」と指摘する。[28]もののけにとり殺された夕顔を光源氏も「添ひ臥し」ており（「夕顔」①一六七頁）、また『栄花物語』では危篤に陥った娘嬉子に対する藤原道長の姿が「御帳の内に、児をするやうにつと添ひ臥したまひて、泣く泣くかかへたてまつらせたまへり」と描かれる（「楚王のゆめ」②五〇六頁）ように、愛するものの死に際して「添ひ臥す」人びとの姿には蘇生の願いを読みとることができるようにも思われる。しかし、ここで注目したいのは、とくに嬉子に「添ひ臥す」道長の様子が「児をするやうに」とされている点である。

『枕草子』は「身をかへて天人などはかやうやあらむと見ゆるもの」として「ただの女房にて候ふ人の、御乳母になりたるものをあげているが、その「御乳母」は唐衣も着ず、裳さえもつけないで「御前に添ひ臥し」、「御帳」のなかを居場所にして女房たちを使っているのだという（三六七頁）。そうした傍若無人にも見えるふるまいが許されているのは「御乳母」として御子に「添ひ臥し」て養育している体裁によるものであろうが、それほどまでに幼児に「添ひ臥す」ことが重要視されていたことをうかがわせる。

嬉子に「添ひ臥す」道長の姿は、「児をするように」とされるように幼児に対するふるまいを想起させるものであった。幼児や瀕死のものに対して「添ひ臥す」ことは、招魂というよりも鎮魂、すなわち「魂ふり」「たましづめ」のふるまいと見た方がより適切ではなかろうか。折口信夫は「外来魂」を附着させることを「魂（たま）ふり」、「内在魂」の発散を防ぐことを「たましづめ」とする。[29]御乳母は御子に「添ひ臥す」ことで魂を附着させて養育をし、道長は嬉子に「添ひ臥す」ことによって魂をふりつけて鎮めようとしていると考えられるのである。

西村亨は「添臥」について「元服は、宗教的に言えば、男性が神となる資格を初めてそなえての誕生なのであるから、その

補佐・誘導の任に当たる女性の存在が必要であり、そひぶしの妻はその巫女が王朝社会に残存した現実的な形であったと言うことができるのである」と述べている[34]が、「添臥」の始原には、元服の折、男性が「神」となる資格を得るために鎮魂の儀礼を執り行った「巫女」の姿が見いだせるのであった。「添臥」は天皇・東宮等に限られたものであったとされるが、それは「添臥」が王者にのみ許されたものであったことを示していようし、「添臥」が男性のもとに参るというかたちをとるのもそのことと深く関わっていると考えられよう。

もちろん、臣籍降下した光源氏が宮中に葵上を迎えることはできない。「その夜、大臣の御里に源氏の君まかでさせたまふ」とある（「桐壺」①四七頁）とおり、元服の夜、光源氏は左大臣邸に退出することとなる。けれども、「添臥」であるかぎり、光源氏が「添臥」である葵上のもとを訪れたとは考えにくく、葵上が光源氏の部屋にやってきたのだと考えなければなるまい。そして、「添臥」たる葵上は光源氏が待つ、光源氏の部屋の「夜の御座」に入ったのであろう。

「添臥」とされる葵上と光源氏との結婚は、左大臣邸のなかに設けられた光源氏の部屋に葵上が参入するというかたちをとって始発したのだと思われる。そうした異例の結婚となったのは、父桐壺帝の光源氏への偏愛に起因していることはいうまでもない。桐壺帝はそうまでして、光源氏に対して東宮に準じた待遇をしてやりたかったということなのだろう。

ただし、そうした形態をとったのは結婚当初だけであったらしく、以降の物語に確認できるのは、葵上のもとを訪れる光源氏の姿である。先に見たように、後一条天皇のもとに入内した威子は「夜大殿に入たせたまふ」折には「やがて動かでゐ」たところ近江の三位に「あなもの狂ほし」といわれ、敦良親王のもとに参入した禎子も「動きもせさせたまはねば」東宮に抱えられて御帳台のなかに入れられていた。男性がいる御帳台のなかに入っていくことがためらわれるのは羞恥心のためばかりではなく、何よりそれが自身を地位の低いものとしてふるまうことであったためであろう。葵上は「このをりの後見なかめるを、添臥にも」とされて「添臥」に決まるが、「多くの後見（ウシロミ）は、主人に対して、低い位置にあるものであつた」とされる[31]。葵上は「添臥」として結婚生活を送ることを受け入れることができなかったものと推察される。葵上は「添臥」たることを拒絶して光源氏を自分の部屋に通わせ、光源氏は左大臣邸に住みつくことを拒んで葵上の部屋に通っていたのであった。

当該場面において、左大臣に促された葵上は光源氏の部屋に

しぶしぶ渡ってくる。見舞いの体裁をとってやってきた葵上は光源氏の「夜の御座」に入ることなどは考えていなかったことだろう。ところが光源氏の求めに応じて発したことばを契機に、やにわに光源氏が「夜の御座」に入ってしまう。そのふるまいは「問はぬはつらきものにやあらん」といった葵上の方から「夜の御座」を「訪ふ」ことを強要し、結婚当初の「添臥」としての立場を突きつけるものなのであった。「ふとも入りたまは」ぬ葵上ではあったが、「添臥」の葵上がそのままでいることは「もの狂ほし」きことであり、そうした状況で光源氏が「夜の御座」のなかから声をかけるはずもない。「聞こえわづらひたまひて」の動作主はやはり葵上であり、葵上が光源氏に抗弁するものの光源氏が聞き入れない状況をいうのであろう。やむなく葵上は光源氏の「夜の御座」に入って「うち嘆きて臥したまへる」のであったが、「なま心づきなき」光源氏は、葵上を「ねぶたげに」扱いながら「世を思し乱」れ、北山で見かけた若紫のことに思いをめぐらす。光源氏はいまここにいる葵上を見つめることなく、葵上は屈辱に堪えながら朝を待ち望むほかない。

もとより勝ち負けなどということでは評することのできぬ、冷え冷えとしたふたりの間柄がそこには語られているのであった。

五、「夜の御座」に籠もる光源氏

しかし、その葵上が急逝する。「葵」巻のことである。鳥辺野における葵上の葬送後、光源氏は「殿におはし着きて、つゆまどろまれたまはず」、亡き葵上の「御ありさま」を思い出しながら心通わぬまま過ごしてきた日々を悔恨し（「葵」②四八頁）、左大臣邸にこもって葵上を追悼する。

夜は御帳の内にひとり臥したまふに、宿直の人々は近うめぐりてさぶらへど、かたはらさびしくて、「時しもあれ」と寝覚めがちなるに、声すぐれたるかぎり選りさぶらはせたまふ念仏の暁方など忍びがたし。

（「葵」②五〇～五一頁）

二条院にも渡ることなく葵上の供養に明け暮れる光源氏は、夜は「御帳の内」にひとりで横になるのだという。「かたはらさびしくて」とあるため、そこは通常葵上とともに夜を過ごしていた葵上の部屋の「夜の御座」であったと考えられる。

「正日まではなほ籠りおはす」とあり（「葵」②五四頁）、光源氏は四十九日まで左大臣邸に籠もることとなるが、その場所も葵上の部屋と見てよかろう。ある時雨の降る暮れ方、頭中将

が訪れたのは、光源氏が「西のつまの高欄におしかかりて霜枯れの前栽見たまふほど」であったとされる（「葵」②五四～五五頁）。桐壺更衣をうしなった折、桐壺帝も「御前の壺前栽」を見ており（「桐壺」①三三頁）、紫の上をなくした光源氏も「前栽」を眺めている（「幻」④五四三頁）が、こうした愁嘆場において「前栽」が描かれる理由について高崎正秀は「亡き人の霊魂が天降（アモ）るといふ信仰」があることを説く[32]。光源氏は葵上の部屋の前の「前栽」に葵上の魂を見ようとしているのであった。

光源氏が左大臣邸を去っていった折、「大臣見送りきこえたまひて、入りたまへるに、御しつらひよりはじめ、ありしに変ることもなけれど、空蟬のむなしき心地ぞしたまふ」とある（「葵」②六四頁）。光源氏を見送った左大臣が「入りたまへる」部屋について、現代注釈書の多くは「源氏の部屋」とするが[33]、どうであろうか。

左大臣が入った部屋は「御しつらひよりはじめ、ありしに変ることもなけれど」とされる。「ありし」は葵上生前のことをさしており、その部屋が葵上生前のままであったことがいわれていることは確かである。しかし、葵上は光源氏の部屋に住んでいたわけではなかったため、この部屋を光源氏のそれとすることはできない。『岷江入楚』が「大臣の源を見送りてまた葵の住給し方へかへり入給ふ也」とするように[34]、左大臣は光源氏が籠もっていた葵上の部屋に入ったと考えるのが妥当であろう。

この年が明けたのち、光源氏は左大臣邸を訪れるが、その際、「立ち出でて御方に入りたまへれば、人々もめづらしう見たてまつりて忍びあへず」とされる（「葵」②七七頁）。「御方」とあり、またそこに「若君」（夕霧）の姿も見えることから、光源氏は亡き葵上の部屋に入ったものと判断されるが、その折も「御しつらひなども変らず」とされている（「葵」②七八頁）。『讃岐典侍日記』には、堀河天皇崩御後「昼の御座のかたにこほこほともの取りはなす音」がして、それが「御帳こほつ音」だとされる記事が見られる（四二六～四二九頁）が、玉腰芳夫は、この天皇崩御後に昼御帳が壊される事例をあげて「御帳が人のあり方を象徴しうることを示している」と指摘する[35]。このことに従えば、葵の上の部屋の御帳もその死後撤去されるものであったことが推察される。しかしながら、葵上の部屋の「夜の御座」を含めた室礼は、葵上の死後、ずっとそのままにされていたのであった。それは左大臣家の人びとの葵上追慕の念によるものであろう。葵上の息が絶えたのち、「御枕などもさながら二三日見たてまつりたまへど」と語られていた（「葵」②四六頁）が、それは葵上の魂が戻ってくることを期待しての所

作であったと見られる。左大臣をはじめとして左大臣邸のものたちは、葵上の部屋の「御しつらひ」等をそのままにしておくことで葵上を慕いつづけ、光源氏もまた左大臣邸を去るまで室礼も生前のままに保たれた葵上の部屋の「夜の御座」に籠もって葵上を追悼していたのであった。

『うつほ物語』「忠こそ」には、亡き妻の御帳台の内に臥す千蔭の姿が描かれている。

……忠こそ、「さるは、かしこにこそ、よき物は侍らめ」と申し給へば、おとど、「『玉の台も』と言ふは、それぞかし」とのたまひて、北の方の御帳の内に、御座所して、大殿籠りなどするに、忠こそ、「今宵は、一条には渡らせ給ふまじきにや」と聞こえ給へば、おとど、

年経れど忘れぬ人の寝し床ぞ一人臥すにもうれしかりける

とて、御座を打ち払はせて、臥し給へば、忠こそ、

寝し人もなみだの上に臥すものを宿の下には数も書くらむ　（一一七頁）

気の休まらない一条北の方のもとから帰宅した千蔭が、亡き北の方の「御帳の内」に「御座所」を設けて横になっている。年を経ても「忘れぬ人の寝た床」は「一人臥す」のでも「うれしかりける」と歌い、「御座を打ち払はせて」臥す千蔭は、「御帳の内」で亡き北の方と語り合っていたのであり、光源氏にも同様の姿を想起することができるのであった。[36]

光源氏が去った後、葵上の部屋に足を踏み入れた左大臣は「御帳の前」に書き捨てられていた光源氏の手習を手に取る。そこには古い詩歌をはじめ、漢詩や和歌などが書き散らしてあり、たとえば、「長恨歌」の「旧き枕故き衾、誰と共にか」とある所には「亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに」との歌が記され、同じく「霜華白し」とある所には「君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬらむ」との歌が書かれてあった（「葵」②六四～六五頁）。「御帳の前」にあったというのであるから、これらの手習は、光源氏が葵上の部屋の「夜の御座」にひとり籠り、書き続けてきたものと考えてよい。光源氏は「寝し床のあくがれがたき」と吐露し、「君なくて塵積もりぬるとこなつ」と亡き葵上に呼びかける。死者との時間。光源氏はこの「夜の御座」のなかで手習をすることによって、亡き葵上と心を交わそうとしているのである。

ほかの女性のもとに出かけることもなく、心をひらいて「夜の御座」のなかで語り合うふたり。それこそこのふたりのあるべき姿ではあった。生前の空隙を埋めるかのように、光源氏

は亡き葵上に語りかける。だが、「夜の御座」のなか、ふたたび葵上が姿を現すことはない。

葵上は煙となって空に消え、光源氏はひとり「夜の御座」に取り残されたのであった。

※本文引用は、『源氏物語』のほか、『落窪物語』『枕草子』『讃岐典侍日記』『栄花物語』『大鏡』は小学館刊新編日本古典文学全集、『うつほ物語』はおうふう刊『うつほ物語 全 改訂版』に拠り、巻名・冊数・頁数等を附した。表記等は私によりあらためた部分がある。また割注は［　］のなかに示した。

注

（1）渋谷栄一『源氏釈』源氏物語古注集成（一六）おうふう、五五頁。ただし、当該歌を引歌と認定することについては、たとえば、鈴木日出男が「これ以外にも下の句の同じ類歌が多」いとして数首をあげたうえで「いずれが引歌として最適か、やや定めがたい」とする（『源氏物語引歌綜覧』風間書房、二〇一三年、四三頁）ように、検討の余地が残されている。

（2）玉上琢彌『源氏物語評釈』（二）角川書店、八六頁。

（3）大津直子「光源氏と葵の上との結婚―「問はぬはつらきものにやあらん」という言葉の意味するもの―」原岡文子他編『源氏物語　煌めくことばの世界Ⅱ』翰林書房、二〇一八年、一九九～二〇〇頁。

（4）古田正幸「『源氏物語』若紫巻における「とはぬはつらきものにやあらむ」考―光源氏の会話文における引歌理解を中心として―」『むらさき』五七、二〇二〇年一二月。

（5）『源氏物語湖月抄　増注』（上）講談社学術文庫、講談社、二七一頁、傍注。

（6）日本古典全書『源氏物語』「若紫」①三一〇頁、頭注二六。

（7）日本古典文学大系『源氏物語』「若紫」①二〇二頁、頭注八。

（8）新日本古典文学大系『源氏物語』「若紫」①一七三頁、脚注一七。

（9）玉上琢彌『源氏物語評釈』（二）角川書店、八四～八五頁。

（10）完訳日本の古典『源氏物語』「若紫」①一八六頁、脚注六。三三二頁、現代語訳。

（11）新編日本古典文学全集『源氏物語』「若紫」①二二七頁、頭注二三、現代語訳。

（12）島津久基『対訳源氏物語講話』（四）矢島書房、一九五五年（改正九版、初版一九四〇年）、一一四～一一六頁。

（13）島津久基『対訳源氏物語講話』（四）矢島書房、一九五五年（改正九版、初版一九四〇年）、一〇二頁、現代語訳。

（14）武笠三『源氏物語』（一）有朋堂文庫、有朋堂書店、一九一四年、一九六頁。

（15）『源氏物語湖月抄　増注』（上）講談社学術文庫、講談社、二七〇頁、傍注。

（16）新編日本古典文学全集『源氏物語』「若紫」①二二五頁、頭注一四。

（17）『源氏物語湖月抄　増注』（上）講談社学術文庫、講談社、二六九頁、頭注。

（18）新編日本古典文学全集『源氏物語』「若紫」①二二五頁、頭注四。

（19）大野晋他編『岩波古語辞典　補訂版』岩波書店、一四三三頁。

（20）高群逸枝「純婿取婚の方式」『招婿婚の研究（一）』高群逸枝全集（二）理論社、一九六六年、四九七頁。

(21) 服藤早苗「『落窪物語』にみる婚礼儀礼—平安中期貴族層の結婚式—」『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』六、二〇〇六年一二月。なお、以下の平安貴族の婚姻の事例については、服藤早苗「衾覆儀の成立と変容—王朝貴族の婚礼儀礼—」（『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』七、二〇〇七年一二月）を参照した。

(22) 服藤早苗「衾覆儀の成立と変容—王朝貴族の婚礼儀礼—」『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』七、二〇〇七年一二月。

(23) 『源氏物語』における「添臥」の用例は、そのほかに若紫のことをさす「世づかぬ御添臥」がある（「紅葉賀」①三一二頁）。

(24) 中村義雄「元服」『王朝の風俗と文学』塙書房、一九六三年、一三七頁。

(25) 「添臥」をめぐる主な先行研究については、須田春子「元服と副臥」（『解釈と鑑賞』一六—八、一九五一年八月）、中村義雄「元服」（『王朝の風俗と文学』塙書房、一九六三年）、伊藤慎吾「源氏物語に見える添臥すと添臥とについて」（『武庫川国文』一一、一九七七年三月）、西村亨「そひぶし—元服の夜の妻—」（『新考王朝恋詞の研究』おうふう、一九八一年）、山中裕「『源氏物語』の元服と結婚」（『源氏物語の史的研究』思文閣出版、一九九七年）、服藤早苗「副臥考—平安王朝社会の婚姻儀礼—」（倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』森話社、二〇一〇年）、青島麻子「「添臥」葵の上—初妻重視の思考をめぐって—」（『源氏物語　虚構の婚姻』武蔵野書院、二〇一五年）などを参照した。

(26) 服藤早苗「副臥考—平安王朝社会の婚姻儀礼—」倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』森話社、二〇一〇年。

(27) 青島麻子「「添臥」葵の上—初妻重視の思考をめぐって—」『源氏物語虚構の婚姻』武蔵野書院、二〇一五年。

(28) 津島昭宏「母に「添ひ臥す」落葉の宮—死と招魂の観点から—」『國學院大學栃木短期大学日本文化研究』二、二〇一七年三月。

(29) 折口信夫「上世日本の文学」『日本文学啓蒙』折口信夫全集（二三）中央公論社、一九九七年、四二八頁。

(30) 西村亨「そひぶし—元服の夜の妻—」『新考王朝恋詞の研究』おうふう、一九八一年、二五二頁。

(31) 折口信夫「日本文学の発生」『日本文学の発生序説（文学発生論）』折口信夫全集（四）中央公論社、一九九五年、三六九頁。

(32) 高崎正秀「源氏物語—日本文学各論　ノート—」『源氏物語論』高崎正秀著作集（六）桜楓社、一九七一年、四六〇頁。

(33) たとえば、日本古典文学大系『源氏物語』は「源の居間に」（「葵」①三五二頁、傍注）、新潮古典集成『源氏物語』は「源氏の部屋に」（「葵」②一〇九頁、傍注）、新日本古典文学大系『源氏物語』は「左大臣が、源氏の部屋に戻る意」（「葵」①三二五頁、脚注二四）、新編日本古典文学全集『源氏物語』は「左大臣が源氏の部屋に」（「葵」②六四頁、頭注一五）と、それぞれ注している。

(34) 中田武司編『岷江入楚』（一）源氏物語古注集成（一一）桜楓社、五八二頁。

(35) 玉腰芳夫「「御帳構えと書院作り住宅（旧稿）」」『すまいの現象学—玉腰芳夫建築論集—』中央公論美術社、二〇一三年、六〇二頁。

(36) 「床」と魂との関わりについては、津島昭宏「床を払う女—『源氏物語』夕顔の造型をめぐって—」（『横浜英和学院教育』三八、二〇一五年三月）に詳しい。